

自立性・自発性を育む未満児の環境づくり
～認定こども園事始め～

発表者 畑野 賀那子（認定こども園 美哉幼稚園）
発表者 門脇 郁絵（認定こども園 美哉幼稚園）
指導助言者 高橋 千枝（鳥取大学地域学科教授）
司会者 作野 幸代（認定こども園 美哉幼稚園）
記録者 田中 菜美子（認定こども園 美哉幼稚園）

1. 発表の概要

（1） 主題設定の理由

本園は、平成27年4月より「認定こども園 美哉幼稚園」として新たにスタートした。2歳児クラス的环境設定を再構築し、新たに満1歳児クラス、1歳児クラスを設置するにあたって、どのような環境（人的・物的）設定をするか職員会で話し合ったり、他園を見学したり、外部の方に助言を頂いたりして、未満児クラスの保育について考えていった。

1～3歳までの子どもたちが、自発的に活動するために保育者はどのように接していくのか、自立して園生活を送り、達成感や、満足感を味わうためにどのような環境が必要なのかを初年度より研究しているところである。そして、幼児期から児童期、青年期へと成長するために必要な土台をどのように形成し、育んでいけるかを保育者も共に学び、追求していくことにした。

（2） 取り組みについて

満1歳児から幼児教育を進めていくために、保育の形態を見つめ直した。そこで、本園は担当制保育という形を取り入れることにし、主体性を育む保育を目指し、「個の保障」すなわち「個々の子どもの思いや活動を尊重し、確保する」という難しい課題に挑戦している。

「子どもの主体性」と「保育者の意図性」を両立するために、環境設定が必要不可欠で、環境が保育の仕方や保育形態も決定づけてくる。

そこで、私たちは未満児保育をするにあたって、その環境を整える事から始めた。

（3） 実践例

① 1歳児・・・次は何してあそぼ？～パーソナルタイムでの活動～

○実践内容

自発的に遊びを発展するために、どのような環境設定をすればよいか。

○実践方法

- ・ パーソナルタイムで玩具の遊び方を伝える。
- ・ 月齢にあった玩具を設定し、子どもたちが自由に遊べるようにする。(C)
- ・ 遊びの中で友だちの介入をなくし、じっくり遊び込めるように見守る。(P)
- ・ あそびを終えるときには片付ける。(D)
- ・ 日々かわらないリズムで生活する。

※ (C)・・・choice (P)・・・play (D)・・・display

○評価の観点

個々で遊びたい玩具を選び、それを繰り返し、夢中になって遊ぶ事ができるか。

単発的な実践ではなく、日々繰り返し行っている実践である。その中で、低月齢で、玩具で遊ぶ事よりも、口に入れて「もてあそぶ」姿が多く見られたA児の事例を検討

〈Aくんの事例〉

○個別のねらい・・・玩具の遊び方を知り、簡単な操作の遊びを楽しむ。

A児は保育者が意図する遊び方を繰り返し広げるのではなく、偶発的な遊びに興味を示し、夢中になってあそぶ姿を見せた。日々の姿と重ね合わせ、A児は、完成させて達成感を味わえる気持ちがまだ発達しておらず、感覚的な遊びに興味があることがわかった。この実践で、A児の「楽しみ方」を知る事ができ、そこからどのように遊びの関心に変化するかを引き続き観察していきたい。

② 2歳児・・・「ぼくのぼしよ、わたしのおもちゃ」～ままごとのタイミング～

○ 実践を通して確かめたいこと

- ・ 貸し借りの概念がまだ出来ておらず、会話力、言語力に差のある2歳児にままごとコーナーは必要なのか？
- ・ 4月からままごとコーナーを設定するのではなく、遊びを楽しむ為の土台をしっかりと作る必要があるのではないかな？

まず、じっくり遊ぶことの大切さに気づき、1歳から引き続きあそんでいく積み木を通して秩序を学ぶことで、ままごとにも不可欠な秩序を身につけられるのではないかな？

○ 積み木コーナーの実践

積み木コーナーを設定し、積木を小箱にわけ、常に子どもが手にとって遊べるように、棚に設定する。しかし、積木が混ざったり、取り合いになったりするトラブルが発生。

そこで、積木の設定を変えた。

- ・ 積み木コーナーで遊べる人数を限定。
- ・ 積み木と箱に目印をつけ、自分が使っている積木がわかりやすいようにする。
- ・ 積み木で遊ぶ場所も明確にするために、色別のマットを敷く。
- ・ コーナーが開いているかを自分で判断できるように、出入りにカードを置き、利用するときにはめくるようなシステムを導入。

→遊ぶ積み木、遊ぶ場所が分かり、落ち着いて遊び始める。また、友だちの介入が無くなり、玩具の取り合い等の不必要なトラブルが減り、個々でじっくり遊べるようになった。

○ままごとコーナーの実践

ままごと遊びをする時期

- ・ 言葉が少しずつ増え、簡単な言葉のやり取りが成立する時期が好ましい。
- また、4月からじっくり一人遊びを楽しみ、選んで・遊んで・片付ける、という習慣や秩序が身に付き始め、自然と友だちとの関わりを求めるようになる頃が好ましいと考えた。

ままごとのねらい

- ・ 模倣遊びの中で秩序、コミュニケーション能力を身につける。

環境設定

- ① 秩序を分かりやすくする。

(カードでコーナーの出入りを制限する。)

※積み木コーナーのカード同様

- ② 自分の物と他人の物を分かりやすくする。

(ままごとで使う玩具を4人色別で設定する。)

→①、②を合わせると玩具の取り合い等のトラブルが減少し、じっくりままごとを楽しめるようになった。

職員間で話し合ったこと

- ・ 4人限定になると待てずにコーナーに入り込み、トラブルになることがあるのではないか？

→日々変わらないリズムで生活することことで生活の見通しがもてるようにし、今遊べなくても遊べる時がくるという安心感や信頼感がもてるようにした。また、ままごとコーナー以外にも興味を持てるコーナーを設定し、遊びが一つのコーナーに集中しないようにした。

・トラブルを通して社会性を学べるのではないか？

→2歳児の社会性とは何かを考えた。2歳児の社会性とは、物の貸し借りや共同して物を使うことができる事だと考えた。発達段階をふまえると、4月当初からは難しいと考えられた。まずは、一人ひとりがイメージをしっかりと持って遊びを楽しめる環境を作っていくことにした。

ままごとコーナーを設定する時には最小限の玩具からスタートすることで自発的な発展が2歳児でも見られることが分かった。また、決められた遊びをこなすのではなく、「自分たちで作りあげる」楽しさを感じられると考えた。毎年の子どもたちの特徴は違う。その年の特徴によって環境を設定し、子どもたちと一緒に考えていきたいと思う。

質疑応答

(質問者 A)

低年齢のうちから、個の生活の保障であるとか、秩序間をしっかりと備える保育を目指しておられることが、とても感じられる発表であったと思います。質問なのですが、2歳児さんで、今16名のお子さんを3チームで分けて、今は積木とままごと、という形で4セットずつ、コーナーをつくっておられるようですが、あと、子どもたちは3つに生活が流れていて、そこで遊べる子どもたちが、単純に考えて8人でいいんですかね。4セットずつ、コーナー遊びができるようになっていて、あと、その他の子どもたちは、あと8名ですかね。その子どもたちは、どのような遊びの形態をされているのかを、お聞きしたいと思ひまして、お願いします。

(門脇)

1チームが部屋で遊んでいる時には、他のチームは、講堂に行ったり、外で遊んだりしていて、部屋の中には1チームだけいることになっております。2チームが一緒になっていても、積木や絵本や木の玩具がありますので、自発的にそれを選んで遊んでいます。

(質問者 A)

積木遊びの時に、4つに色が分かれていますのですが、子どもたちが、ダイナミックに遊びたくて、自分が持っている積木以上のこともあるかなと思うのですが、その場合、2セットを子どもが使うという状況になるのでしょうか。

(門脇)

今の段階では、そのような、多く使いたいという、子どもたちからの要求はでてはないのですが、3学期くらいになると、やはり、多く使いたいということがでてきますので、設定上変えまして、4つのコーナーではなく、2つのコーナーにして、場所を広げて、積み木の量を増やしたりはしています。

(質問者 B)

担当制での保育をされていて、2歳児と1歳児をされているということで、この2歳児1つのクラスが一度に遊ぶということは、一日の生活の中で、1年間無い感じですかね。

(門脇)

行事のときなどは一緒に遊ぶことはありますが、生活のなかでは、チームごとでの生活を主としています。3学期になったら、年少組に上がるということで、少しずつ集団を大きくしていくことは、ありますが、チームごとでの活動を主としています。

(質問者 C)

昨年度まで、認定こども園さんの方にいたので、0歳、2歳、1歳児を担当してたんですが、このチーム編成は1年間変わりなく、担当の先生、同じ先生が、同じグループの4人なり、3人なりをみるんですか。

(畑野)

はい、そうです。

(質問者 C)

給食なんかも順次になっていますが、4人の配膳が終わったら食べ始める。こっちがまだできていなくても、この4人はできたら食べる。お昼寝もかったばで着替えている子がいても、この4人はできたら寝る。というふうに、流れるんですか。

(畑野)

(イメージ図をスライドで説明)

はい。個別で食べ始めることもあります。基本グループごとに配膳後食べ始めます。これは、2歳児なのですけれども、1グループずつご飯を食べるので、手前はまだ、絵本を読んでいる状態で、1番に食べるグループがご飯を食べ始め、次のグループが手洗いの準備に行っている。何人もで行くと混み合って、トラブルになることもありますので、こういう流れにして、基本的にグループで活動しています。

私たちも最初担当制をする時に、どこかのグループが食べ始めたら、お腹が空いて行っちゃうんじゃないかというのを、心配していたんですけども、慣れてくると、次、自分たちの番だという事も分かるので、安心して順番が待てる。そこが開いたら自分たちが次動き出す。これは2歳児さんですが、1歳児も同じようにしています。

基本、担当は変わらず、1年間その担当と共に生活をします。

(質問者 C)

2歳児の流れでいくと、年度後半になったら、3歳児の方に移行されると思うんですが、3歳児

に進級したときに、新入で入ってくる子どもさんもあり、乳児部から幼児部に行く子どもさんもある中で、困ったことはありませんか。

(畑野)

2歳児の時の担当制で、身の周りのことをできるだけ自立してできるように、食事の準備とか、衣服の着脱、トイレの着脱なども、少人数でやるので、基本的なことを、だいたい身につけて進級します。そういう面で、集団に入った時に、最初の3歳児以上児クラスの時に、新入さんで、先生の手が必要になるのですが、基本的なことが出来て進級するので、担当制だから困ったということはないです。

ただ、集団が大きくなって、先生の数も減るので、不安感がでてしまうことを想定していたので、二歳児であそんでいたおままごとを年少クラスに持っていきました。、年少児もコーナー設定することなど、以上児も少しずつ未満児のやり方を取り入れて集団の部屋にいるが、個別で遊べるようになってきたので、その辺は安心して遊べているのでは、と感じています。

(質問者D)

日々、同じグループでの活動ということですが、同じ子と毎日遊ぶという形になると思うんですけど、他のグループのお友だちと、あの子と遊びたいとか、っていうような声はないですか。もし、あった場合は、どのような対応をされていますか。

(門脇)

全く関わらないという事はなく、朝、登園してから9:30までと、お昼寝明けから降園までは、他の子どもたちと関わるような遊びもしています。

(質問者E)

保育者の援助の中で、子どもたちの姿を不必要に言葉をかけず見守る、言葉をかけて見守る、という言葉は何度かお聞きしたように思います。このあたりの先生の思いというか、もちろん子どもたちの活動に対して、子どもたちが考えてやっていることに対して、子どもの姿を見守りたいという思いなのかなと、想像しながらお聞きしたのですが、

12ページの、ままごとコーナーを設定する時のくだりの中で、子どもたちから発信してきたことに、柔軟に答えていくっていうような

子どもたちが色別のチップを遊びの道具に見立てて遊ぶっていうような流れだったと思うのですが、例えば、うちの園での遊びを見ているとリサイクル材を持って来て、ごっこ遊びの食べ物を見立てるために作る活動があったりするんですが、そのあたりの柔軟に答えていくことを、お聞きしたい。

全て、おもちゃの中で対応していくのか、別のリサイクル材とか紙とか、子どもたちが、はさみで切ったりする姿に変化していくのか。

(畑野)

不必要な言葉がけというのは、子どもたちが楽しく遊んでいる姿を見ると、どうしても保育者って、「楽しいね」みたいな声をかけや、子どもは集中しているのに、「ここだよ」とか、そういう子

どもにとって、大きな迷惑な言葉って、出してしまうがちになるので、そういうところはぐっと我慢して、感動は自分の中で秘めるというか、『すごいな』って保育者は思うんですけど、いちいち声に出さず、子どもが求めてきた時には、保育者の方を見ると思うので、その時に、「すごいね」「できたね」とか、そういう言葉がけをするように、私たちも気をつけています。『いらんことはしゃべらん』、そういう意味の不必要。

(門脇)

ままごとコーナーの柔軟にに応じていくっていうこと。この手前に見えますのが、人形にミルクをあげたいって言った時に、リサイクル材で哺乳瓶を作ったりとか、あとは子どもたちが、お人形さんのお世話をしているとおもうんですが、オムツを変えたいということで、本園では子どもたちが、布おむつをしていますので、オムツを人形にあわせて作って提供しています。子どもたちが作ることもあります。はさみを使って作るということは、まだしていません。

(質問者 F)

今年度、ままごとコーナーの設置は、まだだということで、ままごとに必要なスキルを身につけてからの時期でということ、昨年度だったらいつ頃出され、今年度だったらいつ頃出されるのですか。

(門脇)

昨年度は、秋ごろから、今年度は、まだ、もう少し、積木とか他の遊びの様子を見た上で、まだ、決めては 아닙니다。

グループ討議

Q1「各園でのままごとの設定の様子」

- ・ 0歳児 硬いおもちゃごとセットではなくシリコンのやわらかい素材の物を準備している
- ・ 1歳児 部屋に設定してある。高月齢の女児は喜んで遊ぶ。数を十分に準備し、保育者が仲立ちをして貸し借りが見られる。
- ・ 2歳児 量は少なめからスタートし、知っているわかりやすい食べ物準備し、遊びの様子に合わせて選別してコーナーを作っていく。
- ・ 年少児 好んで遊ぶ。ままごとを中心に友だち同士が関わっている。身につける物は人数分準備して、みんなで一緒に同じ物を身につける。
- ・ 各クラスにままごとコーナーを設定している。食べ物、食器など視覚的に表示をし、仲間分けできるように収納してある。
- ・ 各クラスによってままごとの設定をするかしないか判断。子どもの発達、遊びの傾向を見ながら設定している。

Q2「その中で何を育てたいか。一言で」

- ・ 一体感 ・イメージの共有 ・人との関わり ・言葉のやりとり
- ・ 生活の模倣 ・遊び込む ・友だちとのコミュニケーション ・伝わる喜び
- ・ 友だちの存在に気付く ・自分を出す ・心をひらく ・想像力

Q3 「それはどんな場面ですか？具体的に」

- ・ 誰かがマントをしていると、それを見て他の子もマントを着けに行く。みんなですることが楽しいと思う。
- ・ かばんをもっておでかけ。その姿をみて楽しそう！やってみたい！と思う。一人から友だちと遊ぶ事に広がっていく。
- ・ 保育者など他人とのやりとりを楽しむ中でコミュニケーション力。
- ・ 皿に盛ったり、できあがったごちそうをやりとりするとき。
- ・ ごちそうをつくって誰かに食べてもらって、うれしいと思う。
- ・ 年長児になると子どもたちが遊びが楽しくなるように環境を作ろうとする。その中で自分の思いを言葉で伝えられるようにしている。
- ・ 玩具の貸し借りをする中で、折り合いをつけるようになる。

※グループ討議を通して、日々の保育で何を育てようとしているのか、改めて考える時間を設けた。保育の中で一つ一つの環境に意味を持たせ、保育者も言葉に出して考えられるような討議になったのではないだろうか。

グループごとの発表（全体の感想）

A グループ

美哉幼稚園さんの発表を聞きまして、個々の対応、個人個人の対応がとても丁寧だなと感じました。うちの園はまだ、未満児保育もなくって、満3歳児からの入園なので、私の想像でしか聞くことはできなかったのですが、満3歳児のクラスでも、一人ひとりの自立っていうのを大切にしている、この部分はどの園でも大事なんだなって、感じさせてもらいました。

後半のグループトークでも、ままごとについて、幼稚園さん保育園さんのお話を聞くことができ、とても良かったです。

B グループ

各園のままごとの様子であったり、ままごとで何を育てたいか、それはどんな場面ですか、具体的にっていうことで、この時間では話しきれなくて、とても勉強になりました。人との関わりであったり、言葉のやりとりであったり、生活の模倣であったり、想像力をかきたてる遊びになるんじ

やないかということで、他の園のやり方とか、勉強になりました。今後に生かしていけたらなと思いました。

C グループ

美哉幼稚園の実践のほう聞かせて頂いて、クラスの一斉保育だけではなくて、少人数で個々をしつかり見ていく保育っていうのをすごく大事だなと思いましたし、すごく良いお話を聞かせていただいたなって思いました。

グループ討議の方でも、各園のままごとの様子であったり、園の実態とか、クラスの状況とか、年齢の違いであるとか、いろんなお話を聞くことができ、これからの参考にさせていただきたいなど、思いました。

D グループ

今日はグループ討議で、皆さんと話しをさせていただいて、自分の幼稚園ではまだ、0歳1歳のクラスが無いので、今日話をさせてもらって、参考にさせてもらう事がたくさんあるなと思いましたし、分科会のお話しも聞かせてもらって、個々で子どもたちを見ていくことってすごく大事なことだし、保護者の方にも今日こういうことがありましたよっていうのを伝えるのが、目がいき届いていて、すごいことなんじゃないのかなって思いました。

E グループ

私の園は、新制度に移行していない、普通の幼稚園です。0歳1歳を受け入れておりません。私自身も2歳のクラスはあるんですけども、担任したことはなくて、本当に低年齢児保育っていうのが、未知の領域でしかも、美哉幼稚園さんは、幼稚園から認定こども園にうつられた経緯を発表されるということで、すごく興味を持って参加させていただきました。ご苦労はたくさんあったかと思えますけれども、本当に素敵な保育をされているなという風に感じました。低年齢であればあるほど保育者がきちんと思いをもって環境を構成することがすごく大切だなって感じました。小さい子だから、生活をきちんとしていかなければいけない。その生活を保障するのが私たちの役割だ。その中で、子どもたちがいきいきと活動できることを目指していきたいと、私も強く思いました。

グループ討議では、各園の先生方からすごく参考になる話をたくさん聞かせていただきました。今日は、おままごとという切りくちだったんですけども、他の切りくちからでのお話しも聞かせてもらったら、また参考になることがたくさんあるんじゃないかなと思いました。本当にすてきな会でした。

高橋先生指導助言

びさい幼稚園が認定こども園になり、未満児、1,2歳児を受け入れるということになって、本当にこれからはじめる、今はじめたばかりというなかで、これだけの検討をしたり、話し合いをしたり、保育に向けて日々努力をされている。今まで3,4,5だったところから、もっと小さい子どもを受け入れるといった時には、かなりの混乱があったんじゃないかな、と思います。

1歳児と2歳児のお話をきいた訳ですけれども、担当制にするということ、いったいこれは何なんだろう、担当制にするってどういうことなんだろうなと思いつつ、聞いていたんですが、そうですね、年齢が低い子どもたちにとっては養護的な側面が大事になってくるのかなと思います。

もちろん、単なる世話をするというだけではなくて、教育的な側面ももって、養護ということを考えていかないとと思うのです。家族の単位と似ているという話をされていたグループがあったと思うのですが、まさに、そうなんだろうな、と思って聞いていました。

何人が適しているとか、何人にした方がいいとか、この場で断言することはできないんですけれども、やはり、年齢が小さければ小さいほど、少人数で家庭的な雰囲気の中で子どもを育てていく、子どもの育ちを把握していくことが重要だと思います、家庭に子どもは30人もいませんからね。

そう思うと、人数をしぼっていく必要があるのかなと思います。

担当制をしいていて、さらに、一つのクラスで時間軸を3つに分けて、個別で活動する時間（パーソナルタイム）と、いろんな時間をずらしながら、やっていくということだったので、最初は私も、そうですね、時間をきちつきちと決めて動いているのかなっていうイメージがあったのですね。

でも、実際訪問してみると、本当に緩やかな時間の中で、それぞれが動いているっていうふうに、私には見てとれた、なぜ、例えば、時間を決めるか、なんで、何時から何時までで、この時間は誰がどこにいてと、なんで考えるか、誰のために考えてるかという、子どものためではないかもしれない。

子どもは多分何時から何時までっていう感覚が、とりわけ1,2歳児にはないと思うんですね。もちろん、3,4,5になってくれば、長い針がここまできたらお片づけとか、分かってきますけど、0,1,2にとっては、そういった厳密な時間的枠組みは、無い。

そうすると、なぜ、時間通りに、今お昼の時間とか、今お昼寝の時間っていうふうに決めてるかという、大人の事情になってくると思うんですね。

でも、それは、集団で活動していれば悪い事では決してなくて、今回お話ししてくれたところでは、すごく時間を決めて、きちり動いていると思うんですけれども、ただ、そういうやりとりが、先生方の中で常にされているからこそ、外側から見ると、すごく緩やかに時間が流れているような気がしました。

だから、ご飯の時も、例えば画像で見ると、ここに絵本を読んでいる子がいて、ここで手を洗っている子がいて、ここでご飯を食べている子がいてというふうに、切れるんですけれども、あれは、実は、流れの中の一場面、ただ単なる一場面であって、あそこを流していくと、ほんとに自然に子

ども達が、動いているんですね。

ご飯1チームが終わったから、次のチームがそのテーブルを使うではないので、また、別のテーブルを使いながらご飯を食べていくので、緩やかな時間の流れの中で子どもたちがゆったりと、動いているっていう枠組みだなと思います。

ただ、最初は、きっと、もっと、大変だったんだろうと思います。子どもも保育者も多分、くり返しくり返しやっていくことで、染みていくんだと思うんですね、体の中に。

経験って大事だよって、子どもたちには言いますが、実は大人も経験するってすごい大事、もちろん大人はもう少し育っているはずなので、経験していないことも頭の中で考えて、そして動くってことをしなければならない、ただ、そこに、実が伴うかどうか、真の意味で動けるかどうかはどれだけ経験を積むかという事だと思うんですね。

理論と実践は両輪だと言うと思うんですけど、まさに、子どもも経験が大事なんですけど、大人も経験が大事、ただし、大人は経験だけでは行き詰まります。必ず、理論的背景を持っていないと、行き詰まることもある、必ず、やって来ます。これは、言えます。だからぜひ、理論を頭の中に入れた上での経験を忘れないようにして欲しいって思っているんですね。

そういった意味で先ほども言ったように、緩やかな時間が流れているのはなぜかっていうと、その背景ですね。時間的枠組みをとるということ、それから、担当制を敷くっていうことの意味は何かかっていうとそれは、すなわち、個別にじっくり関わっていくのを忘れないからこそ、できるんだと思うんです。だからこそ、多少時間がずれた、どこかがブッキングしたって言っても調整できるんだと思います。それを、何時にどこ行かなきゃ、何時に何しなきゃ、となると、保育者同士のトラブルになる。でも、そうではないものが、この中では動いていたので、担当制をとっていき意味というのが見だせているんじゃないかと思いますし、子どもも4月の時点では、わちゃわちゃしていると思うんですが、3月、1年を、過ごしたぐらいの時には、落ち着いてくるからこそ、今日の発表にもあったように、その子が2歳に上がった時にそんなに混乱もなくということになっていくんだと思うんですね。もちろん部屋も変わりますし担任の先生も担当の先生も変わっていきます。そうすると、多少の混乱はあると思いますが基盤がしっかりしているので、1歳の時の繰り返しの生活というのがしっかり身についているので、修正は早く済むんだろうと思っています。ですから、自分が今やっていることの意味だとか背景というのを忘れてしまうと、ただ形式的に担当を敷くことだけ、動くことだけというふうになってしまうので、そこが大事なんだろうと思います。

ということは裏を返せば、担当制を敷いてない保育園、幼稚園、認定こども園でも同じことができるっていうことですよ。だからやっぱり背景を考えていくこと、意味を考えていくこと、というのはとっても大事、そこにどういう環境を設定できるか、その環境ってというのはやっぱり与えられた環境がその場その場にあるわけですから、全員同じにできるわけではないですよ。すべての幼稚園、認定こども園が同じにできるわけではないと思うので、その与えられた環境の中でどれだけ意味のあることができるか、というのがとても大事なことだと思います。

片付けなんかもそうだったと思います。ここでは片付けという言葉ディスプレイというふう

考えて片付けをしていますという事だったんですが、私は環境設定の時に保育者側、大人側はものすごく綿密に考えてほしいと思うんです。だけれども子どもは思わずやっちゃう、その「思わず」っていうのが大事だなというふうに思ってます。なので、今もそうですけど、椅子がここにあるから私は座りました。たぶん椅子が無ければ立って話してたと思います。椅子がなくても「どこ？どこ？椅子は」とは言わなかったと思います。子どもたちは置いてあるだけではたぶん環境として認識しません。置いて、それをどういうふうに子どもたちに見せるのかがとても大事だと思うんですね。ですから、この積み木を片付けるとか、パズルとかを片付けるなんていうときに、どうやったら思わずそこに置いちゃうかなっていうのを、考えていく環境作り。だからこれは言葉で、例えば、片付けを「ディスプレイ」にしましたって言ったから子どもが動くわけではないわけですよ。だからそこにある意味、背景をしっかりとらえたうえで、考えていったことなんだろうなというふうに思います。で、そういうことをしてじっくり子どもと関わるからこそ、発達が把握できるんだと思います。

個別に関わるかどうかというのは別としても、今みたいにじっくり関わっていくこと、子どもをしっかりと見ていくことというのはどの子であっても大事なことで、今日のお話でチェーンを入れていた時に子どもがたまたま別の遊びをして、保育者としてはこういうふうに進んでもらいたい、も敷くはこういうふうに進ぶものとして作ろうとしたんだけどちょっと違う遊びをした。ただ、そのちょっと違う遊びをしたことによって、子どもが今まだ保育者のねらいを持って作った遊びとは少し違う段階のところに発達がありそうとわかった。じゃ、どういうふうにそこをじっくり育て、また更にもう一つ発展した発達に伸ばしていくか、というようなところもやっぱりじっくりと関わっているからこそ分かることなんだろうなと思います。これは多分、少人数だからとか担当制だからとかいうことではなくて、その背景にあるじっくり関わっていくっていうことですよ。そういうことが、子どもの理解につながっていく。私はそうだなあと思ったのが、「遊び方が違った、だからこういうふうに進ぶようにした」ではなくて、「A君の楽しみ方を知ることが出来た。ここからA君がどれだけ充実してさらに変化していくのかを見ていきたい」ということ。私よく「発達に沿う遊び」「発達を培う遊び」というふうに言うんですけど、今まさに子どもが楽しんでやっていること、これは発達に沿っているんだと思うんですね。ただやがてその発達に沿っている遊びも子どもは飽きてくるでしょうし、物足りなくなってくる。そしたらさらにもう一段階発達を培っていく、引き上げていく遊びを取り入れていく。その「沿う」遊びと「培う」遊びで、培う遊びもやがては沿う遊びになっていくわけですから、常に今、子どもがどの段階にいるかということと、この先どういうふうになっていくのか、変化をしていくのかっていう予測を立てていく、これはとっても大事なことだなというふうに思いながら発表を聞かせてもらいました。

実践2とグループワークはままごとのお話しですね。ままごとのタイミングっていうことで、まず一番最初に私はああそうだなって思ったのは、ままごとって当たり前なりにやりませんか？お砂場もそうだし、ままごともそうだし、紙芝居も絵本もそうだろうと思うんですけど、普通に生活の中に、よく言えば溶け込んでるんだろうと思うんですけど、ままごとコーナーはそもそも必要かどうか

かっていうところから考える。当たり前のことを当たり前とは思わないでひとつひとつやっぱりこう、環境について考えてみるというのはとてもはっとさせられることだなというふうに思って、聞かせてもらいました。

そこに気が付かないと、もっとままごとあそびをよくするには？っていう足し算になってくるんですね。どんどん足し算になってくる。足し算は悪い事ではないと思うんですけども、足すことによって余分になっていることもあるのかなと思っています。なんでこれここにあるんだろうとか、これ、余計じゃないかな、って思うこともあったりして、たまには引いてみることも考えないといけないなというふうに思いました。そういった意味では、当たり前を当たり前と思わないで、もう一度保育を考えるっていう体制というか姿勢ですね。私は保育を日常しているわけではないのですが、自分が例えば授業をやっていたり、いろんな話をしていくなかで、ああそうだそうだ、ちょっと私も考えないといけないなって考えさせられました。いろいろな幼稚園の環境があると思います。それこそ建ってる場所から広さからそれから子どもの数、職員の数、保育体制もそうですよね。今日グループワークのなかでいろんなままごとの種類、私たちはこういうふうにやっていますということが出ていたと思うんですけども、本当に、園に持ち帰ってその園でできることの最大の、最大に機能が発揮できる環境、ままごとコーナーだったりままごと遊びだったり、それから今日講演にあったような砂遊びだったり、それからこの中でも今日の発表にもありました積み木遊びだったり、そういったことをいろいろ考えてほしいなと思いました。

個別に配慮が必要なお子さんの対応をしていた時に、その幼稚園のクラスの中に、人ひとりはいれるようなふすまがあったんです。そこがどうしても気になっちゃって、自由遊びの時も先生のお話をする時もどうしてもふっと気になるんでしょうね。のそのそと入っていく。するとほかの子も気になり始めるし、一緒について行っちゃう子もいる。「このふすまどうにかならないかな？」っていうんで、ふたをしてみたり、開かないようにしてみたり。でも子どもって開かないようにすると、「どうやって開けよう？」って考えるんですね。いたちごっこというか、子どもはすごいなあと思うんですけどどうしても開けちゃうんです。それで考えたときに、「あ、開けちゃえばいいんじゃない？」ということで、閉めるのをやめてふすまごと取ったんです。で、中にあるものを見せたんです。そしたら子どもは入らなくなりました。それはたまたまよかったというか、「あ、入らない」ということにみんなが気がついたんですけど、「ふすまは閉めるもの」っていうふうに、ずっとみんなの頭にあって、取っちゃえばいいんだっていうのはなかなか思いつかなかったんですね。

当たり前を当たり前と考えてちゃいけないんだっていうのははっとさせられることがあります。先生方からの提言からはっとすることもあるので、今回も「ままごとってそもそも必要なの？」って言われて、「ああそうか」とはっとさせられました。いろんな環境があるなかで、楽しいままごと、2歳に合うままごと、3歳に合うままごと、いろいろ考えていってほしいなと思います。

「不必要な言葉かけをせずに見守る」というのを言ってくださったんですけど、「不必要に言葉

をかけず」っていうと、言葉のイメージとしては「声かけないのかな？」と思うのですが、実はそうではなくて、それほど慎重に言葉を選んでしっかり声かけをしているということなのです。私も行ったときに先生方の、子どもたちの言葉だけじゃないんですよ、子どもたちの視線、なにか言いたかったら先生のほうを見るっていう話をしてくださったと思うんですけど、そういった表情、視線、言葉、そういったもの一つ一つ拾いながらタイミングの良い、とても慎重な言葉かけをしているので、「かけず」というふうにすると黙っているのかなというイメージになっちゃうんですけど、そうではないなというのを感じました。

それから社会性という話も出ていたので、ちょっとお話をさせてもらいますが、社会性とトラブルですね。子どもたちはやはり人と関わることで成長していく。ですからトラブルも必要なことだろうと思っています。ただトラブルには前提があって、一つはトラブルというのは乗り越えないといけないものだと思っています。それからトラブルを起こしたら、そのあとそのトラブルを起こした相手同士はもっと仲良くなってるのが前提であってほしいんです。けんかするほどなんとかって言いますが、子ども同士も一緒にトラブルって揉めて終わりではなくて、解決したときにより一層仲良くなってること、それから解決をしていく、それを乗り越えていくっていうことが大前提にあると思ってるんですね。

じゃあ、ということで考えると、例えばものの取り合い。これが欲しい、あれが欲しい、ぼーんって押してうえーんていうのが子どもにとっての、2歳児にとっての有意義なトラブルかなと考えたり、いろんな考え方はあると思うんですけど、だいたい2歳児の子どものトラブルって統計をとると、ものの占有なんですね。いわゆる、取った、取らない、私の、私のじゃない、1個少ない、足りない。そういったものを介してのトラブルなので対人ではないことが多いんですね。これはいろんな研究結果が出しています。そういったことを考えると例えば社会性を育むためにもトラブルが必要だっていうときにはものの取りっちはどうなのかなっていうこと、それからトラブルの前提からいくと「そのトラブル必要かな？」と思ったりするんですね。トラブルは必要だと思うんですけども、トラブルによって遊びが発展していかない、遊びが中断されてしまう。トラブルも遊びの一つだと思っているので、トラブルを乗り越えてお友だち同士が仲良くなるというのであれば多少おままごとが中断してもしょうがないかなと思うんです。そうではなくて遊びが本当に中断してしまう、それからけがにつながることを考えた場合に、どういうトラブルが必要で、どういうトラブルが好ましくないか。それから2歳児は一体何だろうと考えたときに2歳児の社会性の発達に対してどういった遊びが大事かなと考えられると思います。

社会性の要素は2つあると思っていて、一つは人と関わること。これは仲良くすることではないということを入れておいてほしいんですね。みんなと仲良くすることではないということ。だからこそトラブルも一つの社会性。もう一つは社会のルール、慣習を守るということ。ただ、ルールを守るとか社会の慣習を守るということは、人と関わってさらに人と関わるのが楽しいと思えるからこそ、ルール守ろうって思えるようになると思うんですね。1, 2歳児のところは人と関わってさらに楽しいって思っしてほしいんですね。だからままごとなんかでもどういったところが大事に

なってくるかなというのを園に持ち帰ってそれぞれの園でぜひ考えてほしいと思います。

やがて、この0歳児、2歳児は3歳4歳5歳というふうに年齢が上がっていきます。その先は小学校になっていきます。課題ということですが、なにかヒントになればいいと思うんですけども子どもたちが環境が変わっていく、もしくは年齢が上がっていくという時に段差をどうするのがいいかというのは、これは個人の意見ですが、段差はあると思います。あっていいんだろうと思っています。段差なくしてっていうのはつまづかないようにというようにこちら側が配慮をしすぎなどところがあるのかなというのが今の反省なんですね。ずっとやって来たなかでの反省で、段差はあるんだろうとっていて、先ほどのトラブルと一緒になんですけどその段差を越えられるような子どもを育てたいなと思っています。だからこそ2歳から3歳のところに行くときに人数も多くなるよ、担任の先生も変わるよ、でも私たちこれだけしっかりやってきたよね、大丈夫、いってらっしゃいって言えるように。それから3歳の担任の先生は、よし、じゃあ引き受けるって言えるように。このやり取りができることが連携なんだろうと思うんですね。だから幼、小も一緒なんだと思うんですね。小学校行ったら大変かもしれないけどあなただったらできるよ、頑張っておいで、子どもたちも頑張れるっていう力をつけていく。小学校は、よし、引き受けたと言える。子どもたちって環境が変わると退行します。一直線上に発達があるとしたら右肩上がりではないんですよ。らせんを描いて時に戻りつ行きつしながら発達していくんだと思うんです。そういったなかで戻っても先に行けるよ、戻ってももっと先に行けるよっていうような育ち、それぞれの発達の段階で育てなきゃいけない力、発達の課題というのがあると思うので、そこをしっかりと育てていくことが次の段階につなげていく重要なところなんだと思います。

積み木のところでもありましたが、子どもたちは積み木の数、スペースが物足りなくなってくると思います。そしたらそこを少しずつ広げていくっていうことも子どもたちの発達に合わせてっていうことでしょうし、2歳から3歳に行くときの人数ですよ。少人数から大人数になっていくのはどうなのかっていったときに、多くなった時にでも少人数で培ったもの、それはきっと大人数になっても発達のなかで子どもがそこにきちんと適応できる力をつけていればどれだけ人数が多くなっても、どれだけ時間が限られてきても大丈夫なんじゃないかなと、先生方もそして子どもたちも信じたいなと思っています。何回か保育を見せてもらって、こども一人一人に関わる思いがとても温かいものに感じることができましたし、それはどこの幼稚園でもきっとあることだと思いますので、ぜひまたこれからもいろいろ子どもたちのために保育をし、様子を教えていただきたいなと思っています。